

旧約聖書神学

アブラハムの生き様を通して仰ぐ神の御思い

T T S 教職志願者コース3年 野町 真理

1、はじめに

聖書を通して、私たちの三位一体の神は、御自身がどのような方なのかを語っておられる。聖書は神の語りかけとそれに対する人間の応答という二つの方向によって形成される歴史的・環境的啓示によって「神であるとは、どんな感じがするものか」という神の心理、つまり神の御思いを語りかけている。それによって、神がどのようなお方であるのかを描き出している。聖書はすべてのことを神の視点で見ることをさせてくれる。

アブラハムという人物は信仰の父として創世記の中に登場する。アブラハムの生涯の中でも、イサクの奉獻を試練として神が与えられたという出来事は非常に衝撃的な物語である。今回はアブラハムの生涯を概観しながら、イサク奉獻の物語に焦点を絞り、神の御思いを仰ぎたいと願う。

2、アブラハムの生涯の概観（イサク奉獻までの出来事）

アブラハムの生涯のすべてにおいて、イニシアチブは主なる神にあったことをまず覚えたい。また、彼の生涯が約束の地への旅であることも覚えたい。これらは約束の地、新しい都への旅をする礼拝共同体の歩みでもあるから。神はアブラハムの必要をすべてご存知であったように、わたしたちの必要もすべてご存知である。旅の道中ではおりにかなった助けがある。

旅の出発

アブラムは、ユーフラテス川の川下のウルに生まれ育ち、そこから川上にあるカランに移り住んだ。いずれの町も月を礼拝する宗教が盛んに行われていた。彼はウルか、あるいはカランで主からの召命のことは受ける。

12～14章

分離、主と共なる歩みのスタート。75歳の時。

神の言葉こそがいっさいにおいて先立つ。

12：1の召命のことは、直訳的に言えば、

「あなたは、あなたの地
あなたの人々（地域）
あなたの父の家（親族）を去りなさい。

そして、わたしの示す地へ行きなさい。」

12：2-3の約束はまとめると以下のような三重の祝福に発展していく。

主がアブラムを祝福する。
アブラムの名を大いなるものとする。
アブラムの祝福が、他の人々の祝福となる。

人生の最大厳粛事である召命にさいして、妻は問題の圏外に置かれるほど第二義的な存在ではない。夫の召命はただちに妻の服従をそのうちに含む。アブラハムの歴史は同時にサライの歴史。同格。しかし、夫を通して神の御言葉を聞いたサライ。「アブラムがサライをたずさえて行った。」

アブラムは、神に従う自分に人をついて来させるだけの断固たる確信をもって、主なる神に告白を捧げた。

（口トに対しても）

祭壇を築いていく歩み。

試練→エジプトでの失敗

アブラムの信仰は激しくゆさぶられていた。

アブラムの姿を通して見る私たちの姿

アブラムが結婚を何と心得ていたか。夫婦であることを隠さねばならぬほど、また隠してさしつかえないほど、結婚は軽いことがらではない。この結婚は「神の合わせ給う」ところであり、したがって「人は引き離すことができない」のをアブラムは考えようとしなかった。彼に与えられた神の約束、すなわち子孫についての約束は、夫である彼だけにかかわるものではなく、妻にもかかわっているという大切なことを忘れていたアブラム。

アブラムの弱さの最たるものは、神の約束に対する弱気。

アブラムとサライに与えられた約束を、神御自身が貫きたもうことを示す出来事。

神を見つめる必要。

神はアブラムの挫折にさいして、立ち上がり、世界の中に介入し、御自身の約束を充実したもう。

神は御自身の約束をどこまでも貫徹するために、この不信と悪徳と悲惨との世界に介入しておいでになる。

祭壇

13章 ロトと別れて住み始めた彼に、カナンの地を彼の子孫に永久に与えることと、彼の子孫を地のちりのように数多いものとする約束の再確認。

15章

これらの出来事の後…

彼は親族の子どもか奴隷の子どもが相続人になってしまうと、主に談判する。

約束の子どもが生まれずに悩む彼に、主は夜空の星を見上げさせて、彼の子孫はこのように数多いものとなると約束の再確認。

信仰義認

アブラムにおいて偉大であることは、彼が何をしたかではなく、何もせず、何もできず、ただ神の言葉に全面的に自己をゆだねること。彼が義と認められたのは、アーメンといって神の御言葉の前にひれ伏したときだけ。

しかし彼は、その約束の確証が欲しいと主に願う。

当時の契約の方法による約束の確証

一方的な、恩寵的な出来事としての契約。

神の誠実は、相手のアブラムを契約の相手たるにふさわしくするまでに恵みの賜物を注いでやまない。それゆえに、アブラムもまた誠心誠意神に仕えた。

彼の生涯の絶頂をなす神との契約

神によって焼かれ、回心したアブラム。

16章

なかなか子どもが与えられない彼は、妻サライの進言を受けて女奴隷ハガルに子どもを生まれさせ、そのイシュマエルを約束の子どもにしようとする。それは神の約束を自らの手で実現しようとする小細工であった。

エル・ロイ＝ご覧になる神

13年間の空白

17章

主が彼の子孫をおびただしくふやすこと、またアブラムをアブラムとし、多くのものの父とする約束の再確認。

エル・シャダイ＝全能の神との契約

アブラムとは「わたしの父は高められる」という意味。

アブラムは「多くのものの父」という意味。

神の主権のもとでの人生の転換。99歳。

割礼（新約のバプテスマ）

目に見える形

アブラムはイシュマエルが相続人となるように主に願う。しかし主は彼に、来年の今ごろ男の子を生むと

約束される。そして、その子をイサクと名づけるように命じられる。イシュマエルのこともさばかず、そのイシュマエルの子孫も祝福される。

18章 主なる神と2人の御使い。

アブラハムは、3人を迎え入れる。肉体的に受胎不可能となっていて心の中で笑うサラに主は再度、来年の今ごろに男の子が出来ていると約束される。

神の友。ソドムに対するアブラハムのとりなし。

19章 ロトの救出とソドム、ゴモラへの裁き

20章 アビメレク王へのうそ

21章 約束の実現。イサク誕生。アブラハム100歳の時。

3、イサク奉献の物語（創世記22章）

22:1 これらの出来事の後、神はアブラハムを試練に合わせられた。

神は彼に、「アブラハムよ。」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります。」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

22:3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、ふたりの若い者と息子イサクとをいっしょに連れて行った。彼は全焼のいけにえのためのたきぎを割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ出かけて行った。

22:4 三日目に、アブラハムが目を上げると、その場所がはるかかなたに見えた。

22:5 それでアブラハムは若い者たちに、「あなたがたは、ろばといっしょに、ここに残っていなさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る。」と言った。

22:6 アブラハムは全焼のいけにえのためのたきぎを取り、それをその子イサクに負わせ、火と刀とを自分の手に取り、ふたりはいっしょに進んで行った。

22:7 イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」すると彼は、「何だ。イサク。」と答えた。イサクは尋ねた。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」

22:8 アブラハムは答えた。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」こうしてふたりはいっしょに歩き続けた。

22:9 ふたりは神がアブラハムに告げられた場所に着き、アブラハムはその所に祭壇を築いた。そうしてたきぎを並べ、自分の子イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置いた。

22:10 アブラハムは手を伸ばし、刀を取って自分の子をほふろうとした。

22:11 そのとき、主の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム。」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」

22:12 御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」

22:13 アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶに引っかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。

22:14 そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエと名づけた。今日でも、「主の山の上には備えがある。」と言い伝えられている。

22:15 それから主の使いは、再び天からアブラハムを呼んで、

22:16 仰せられた。「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、

22:17 わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」

22:19 こうして、アブラハムは、若者たちのところに戻った。彼らは立って、いっしょにベエル・シェバに行った。アブラハムはベエル・シェバに住みついた。

約束の子イサクが与えられてから数年の後、主はアブラハムを試練に合わせられた。なぜ神はアブラハムに対して約束の子イサクを捧げよというようなことを要求されたのか？それはアンモン人の神、モレクに子どもを犠牲として焼いて捧げるモレク信仰と比較すると、捧げる対象が違うだけの恐ろしい殺人命令であるようにしか聞こえない。しかし、レビ記20：1－9において、神はモーセを通してモレク信仰を堅く禁じている。

アブラハムに対する神のこの要求は、文字どおり自分の子どもを焼いて神にささげることであった。結果的にはその要求を貫こうとはされず、イサクをアブラハムに返されたが、アブラハムはイサクを殺したも同然の心境になっていたのである。ここでは神の要求が実現されたかどうかよりも、神がそのような要求をされたという事実の方が重大である。アブラハムへの神の要求は明らかにモレク信仰禁止の戒めと矛盾している。

創世記22章の3つのモチーフ

1、アブラハムに焦点

試練に打ち勝つ信仰の父。

生け贖を捧げた報酬としての祝福、備えととると異教的（ユダヤ教的）犠牲の神学（功績＝功德思想）になる。

しかし、主が試練をあたえられた理由を、アブラハムが主への徹底した全き信頼と献身を示すことによって彼の信仰を確立し、成熟させるためだと考えれば受け入れられる。

2、イサクに焦点

喜んで自己を神に捧げるイサクの自己犠牲の中にイエス・キリストの予型を見る。

3、神御自身（の気持ち）のドラマとして見る神の自己犠牲という主題

我が子を惜しまず捧げたというアブラハムの行為を、ただちに父なる神御自身の行為を表示するものとして受け止める。父なるアブラハムの気持ち→父なる神の気持ち

これは十字架の出来事を通して初めて明瞭に浮かび上がってきた線である可能性が強い。

おそらくこのモチーフの初めの形態は第1のモチーフにある。それを神の徹底して自由な、主体的恩寵に触れ合った初代教会が、一切の報償思想を清算して読み換えたと考えられる。（例えばローマ8:32「私たちすべてのために、ご自分の御子をささ惜しまず死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」）

新約聖書によって回復された、犠牲を巡る本来のストーリー

人間に向かっての、神の自由な自己奉獻の物語→神に向かっての人間（イスラエルと教会）の自由な自己奉獻の物語。

神はアブラハムのように、その独り子を惜しまず与えるほどに、この世を愛された。

しかも、アブラハムの物語にあっては、神の憐れみによって身代わりが与えられることで、結局はイサクを死に引き渡さずに済んだのであるが、神のドラマにおいて、独り子は実際に死に引き渡された。これはあり得ない奇跡的な出来事である！

この第3のモチーフは第2のモチーフをも取り組んで、三位一体論的な神学の形成を促す要因ともなっていく。子の自己犠牲においては父もまた自己を犠牲にしているという仕方、十字架の出来事を神御自身の内部における三位一体論的なドラマとして理解する下地を形作る。

神の子キリストが死を苦しむ時、イエス・キリストの父はひとり子の死を苦しまれるからである。子が十字架上で神の見捨ての中で死ぬ時、父なる神も神の子の見捨てを苦しまれる。このように違った仕方であっても、両者が苦しまれる。すなわち、キリストは死を苦しみ、父は子の死を苦しむ。

J.モルトマン

わたしはもはや単にキリストの十字架が人間にとって何を意味するかを問うのみならず、神の御子の十字架は、「わが父よ」と呼ばれた神御自身にとって何を意味するかを問うたのである。わたしはこの問いに対する答えを、神の深い苦しみを知覚することに見出した。この神の苦しみは、ゴルゴダにおける御子の死と結ばれており、その死のうちに啓示されている。それは限りなき愛の苦しみである。だが、

この苦しむ神という考えは、西洋の神学伝統に反した。この伝統は、神の不死性と共に、神は本質的に苦しまない（アパティー）と教えているのである。…

さらに類似の思想を日本の神学者北森嘉蔵に見出した。彼は、大戦の終わり頃「神の痛み」を発見し、それでルターの十字架の神学を超えたのである。キリストは、超自然的奇跡によってではなく、傷つくことを通して苦しむ力によって助ける。あの時代、ディートリヒ・ボンヘッファーも死刑囚用の囚人房で、「苦しむ神のみが助けることができる」と書いた。神はいつも先ず最初、共に苦しむことを通して助ける。「わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます」詩編139：8。

・父神受苦説ではない。

「実体」としての神に痛みがあるなどというのではない。神の痛みは「実体概念」ではなく、「関係概念」である。すなわち「神の愛」の性格である。この点の理解を欠くことが、この神学を父神受苦説と混同する根本原因である。

4、アブラハムに関する新約の記述

Romans

4:16 そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。

4:17 このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るものようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。

4:18 彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。

4:19 アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだ死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。

4:20 彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、

4:21 神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

4:22 だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。

4:23 しかし、「彼の義とみなされた。」と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、

4:24 また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。

4:25 主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

Heb.

11:8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

11:9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

11:10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

11:11 信仰によって、サラも、すでにその年を過ぎた身であるのに、子を宿す力を与えられました。彼女は約束してくださった方を真実な方と考えたからです。

11:12 そこで、ひとりの、しかも死んだも同様のアブラハムから、天に星のように、また海べの数えきれない砂のように数多い子孫が生まれたのです。

11:13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。

11:14 彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。

11:15 もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会があったでしょう。

11:16 しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

11:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。

11:18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と言われたのですが、

11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。

Jam.

2:21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。

2:22 あなたの見ておるとおり、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによって全うされ、

2:23 そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。

2:24 人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。

John

15:13 人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

15:14 わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。

15:15 わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。

15:16 あなたがたがわたしを選んだわけではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。

参考文献

[1]渡辺信夫、”アブラハムの神”、新教新書（1966）

[2]北森嘉蔵、”旧約聖書物語”、講談社学術文庫（1995）

[3]芳賀力、”救済の物語”、日本基督教団出版局（1997）

[4]北森嘉蔵、”神の痛みの神学”、講談社学術文庫（1986）[1946年初版]

[5]J. Moltmann、”今日キリストは私たちにとって何者か”、新教出版社（1996）